

そしてわたしが見たもの 聖なるものこそ、わたしのことばであれ！

すなわち もろもろの時代より古く

西の神々 東の神々のさらに上にあるもの、

その自然が、いま剣戟の音とともに目ざめたのだ。

そしてエーテルの高みから深淵の底にわたって、

太古に変わぬ確乎たる掟により聖なる混沌から生み出されて

靈活の気はふたたびおのれの新生を感じるのだ、

万物を創造する靈活の気は。

20

本源的な自然の生氣が生まれるのは、混沌のなかからである。そういう生産性のゆえに混沌は聖と呼びうる。

そして男子が高貴な事業を企てるとき

その眼に烈火が燃えるように、

いま新しい徴 世界の事業の数々によって

焔が詩人らの魂に点じられた。

そしてかつて力を現わしたが、ほとんど感じられることのなかったもの、

それがいまようやく明らかとなり、

わたしたちのために微笑みながら奴僕の姿で

耕地をたがやしていたものたち、それもわたしたちに知られてきた、

生々の氣に充ち溢れたもの 神々の諸力も。

30

「新しい徴」時代の激動。フランス革命とそれ以後の戦乱等。

きみはその諸力がいかなるものかを訊ねるのか？ 歌のなかにその生氣は吹きかよって

歌が 真昼の太陽とあたたかい大地から

また大氣を震わす嵐から生いそだつときに。また

時の深みのなかでいっそうよく準備され

5

つまりは自然の力である。

いっそう意味ふかくなり わたしたちに知りやすくなくて

天と地のあいだ 諸民族のあいだを駆けめぐる時代の嵐から それが生いそだつときに、

それらに共通の生氣から生まれる思いが

しずかな余韻をひいて詩人の魂にやどるのだ。

それゆえ 激烈な火に打たれるや、早くから無限なものとして親しんでいた

詩人の魂は 追憶によって

とどろきふるえる。こうして聖なる電光に点火されて その魂には

愛を受けて生み出された果実 神々と人間とが力を共にした事業、

歌が成就して その両者のために証しするのだ。

それと同様に 詩人たちの言いつたえによれば、まのあたりに

神を見ようと熱望したために、セメレーの家に雷火は落ち

神に撃たれたその女人が、疾風雷電の結実、

あの聖なるバッカスを生んだのだ。

50

「両者」とは、むろん神々と人間。
「パンと葡萄酒」一六六ページ
の注の第二項を見よ。

それゆえに地上の子らはいま
天上の火を 危険なしに飲むことができるのだ。
しかし詩人らよ、わたしたちにふさわしいのは、神の荒天のもとに

頭をさらして立ち、

父の雷火そのものを手の手に

つかみ、その天上の賜物を 歌に

つつんで世の人々に頌つことだ。

なぜなら、わたしたちの心が子供のように天真なら、
わたしたちの手に汚れないなら、

60

酒を創始したバッカスに媒介されて、人間は酒という、危険のない天上の火を飲むことができるようになった。そうになったことの根底には、神の威力に直撃されたバッカス母子の犠牲的な悲劇がひそんでいて、詩人のなすべきことも、それに類推して考えられてくるのである。

歌は昼の陽光と温い土から生れ
空を翔る嵐から またそのほかの

時代の底で入念に用意され

天と地の間を巡りながら 明らかな

深い意味を告知する嵐から生れ 民らのもとの

共通の霊の思念となり

詩人の魂の中で静かに終止する。

詩人の魂は長らく 限らない存在に

なじんでいたが 突然の衝撃に襲われて 記憶に

ゆり動かされ 神聖な光芒に点火され やがて魂から

愛の結実が 神と人との作り成した

歌がめでたく誕生し 神人双方を証する。

詩人の伝えでは 神を現身に見ようと願った

女 セメレの家を電光は搏ち

神に搏たれたセメレは生んだ

嵐の果実 酒神バックスを。

かくして天の火なる酒を 地上の子らは

危険を冒すことなしに賞味する。

我らに叶うのは 神の嵐のもとで

詩人たちよ、頭もあらわに直立ち

父神の光芒を 父そのものを わが手に

捉え 民に天上の施しを

歌にくるんで手渡すこと。

幼児さながらに心清く

我らの手も無垢ならば

父の清らかな光芒も 焼き焦すことはない。

深く震撼され 強大な神の苦しみを

ともに苦しみつ つ 高まり寄せ来る神の